

概 要
<p>第 15 回 市民と市長の対話ひろば ～もりりと語ろう、宝塚市の未来～</p> <p>テーマ：公立学校園では日本初！</p> <p style="padding-left: 40px;">西谷地区で国際バカロレア（IB）教育を通じた</p> <p style="padding-left: 40px;">幼稚園から中学校まで一貫した探究型学習の取組へ</p>
<p>日時：令和 8 年 1 月 21 日（水） 午後 2 時 00 分～午後 4 時 00 分</p> <p>場所：教育総合センター 視聴覚室</p> <p>参加者：28 名</p> <p>出席者：</p> <p>森市長</p> <p>国際バカロレア機構</p> <p>アジア太平洋地域開発及び高大連携アソシエイト・マネージャー 黒川礼子さん</p> <p>教育委員会管理部－高田部長 教育委員会学校教育部学校教育担当－三ヶ尻次長</p>
<p>《説明》</p> <p>1 国際バカロレア（IB）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1968 年、スイスのジュネーブで設立された財団。 ・最初は高等学校向けプログラムが始まり、現在では 162 カ国で広がっている。 ・IB の使命は多文化理解と平和な世界を築くこと。 <p>2 IB の提供するプログラム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4 つのプログラムがあり、順に提供される： ・ディプロマプログラム（16～19 歳） ・ミドルイヤーズプログラム（中等教育） ・プライマリーイヤーズプログラム（小学校） ・キャリア関連プログラム（高等教育） ・日本国内では 141 校が IB 認定校。 <p>3 IB の教育理念</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちを「探究心を持った知識人」として育成し、文化を尊重し平和を築く。 ・IB プログラムは共通の理念に基づき、教育活動を展開。 <p>4 IB 教育の特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科を横断的に学ぶ学際的アプローチ。 ・学びのプロセスを重視し、単に知識を教えるのではなく、「学びの本質」に焦点を当てる。 ・教員はファシリテーターとして、子どもたちの日々の成長をサポート。 <p>5 IB のプログラム導入状況</p> <ul style="list-style-type: none"> ・世界で 6,074 校が IB 認定を受け、日本では 7 番目に多い。 ・日本の IB 認定校は私立学校が多く、公立は 16%にとどまる。

・主にインターナショナルスクールで導入されているが、公立校でも選択肢が増えている。

6 日本国内での IB 教育の実施例

・公立校と私立校、またインターナショナルスクールでの導入例を紹介。

7 IB の学びと教育理念

・探求型教育、プロジェクトベース、概念理解を促進する方法を採用。

・幼児教育（3歳～12歳）は、遊びを通じて学ぶアプローチが強調される。

8 PYP（初等教育プログラム）について

・幼児教育では、子どもたちの関係性と学習空間を重視。

・子ども同士や家庭、先生との関係性を保ちながら学びをサポート。

・安全で多機能な学習空間を提供。

9 IB 教育の目的

・教室で学んだことを社会で活かす、応用性のある教育を提供。

・自分の社会的役割を意識し、行動を起こせる人間を育成。

➔ 市長

○ IB 教育経験者である高校3年生の小谷さんに発表を依頼

《小谷さん（IB ディプロマ・プログラム経験者）の発表》

1 概要

・高校にて IB ディプロマ・プログラム（DP）を履修（少人数制・12人学級）。

・IB は「探究学習のみ」の特別な教育ではなく、普通科高校と同様の基盤教科を学習している。

・主要6教科に加え、TOK（知の理論）等のコア科目があり、コア科目は自律的な学習が中心。

2 教科ごとの学びの特徴

・文学：問題集中心ではなく、書籍を通じて問いを立て、根拠をもとに議論する学習。

・歴史：用語暗記ではなく、出来事の因果関係や背景を分析・論述する学習。

・数学：英語での出題や電卓使用が認められ、解答プロセスの説明が重視される。

・芸術：異なる時代・地域の作品を比較し、共通点や相違点を考察。

・TOK：身近な事例をもとに、正解のない問いについて考える学習。

3 IB での主な気づき・効果

・先生も「教える側」ではなく「共に学ぶ学習者」として関わる。

・生徒が主体的に問いを立て、学習を進める能動的な学びが中心。

・明確な答えや終わりがなく、自ら考え続ける姿勢が求められる。

・読書や日常の出来事に対する見方が変化し、物事を多角的に捉える力が身についた。

・議論を通じて、正解を競うのではなく、相手理解や合意形成を重視する姿勢が養われた。

4 総括

・IB で身についたのは知識そのものより、社会や将来に活かせる思考力・対話力である。
・課題量は多いが、それ以上に得るものが大きく、IB を選択して良かったと感じている。

➡ 市長

・学生本人の努力と成果がよく伝わる発表であり、IB 教育の到達イメージを具体的に感じることができた。
・今回紹介されたのは主に私立校の DP (大学進学を見据えたプログラム) であり、公立校では NIP 等も含め、同一の形をそのまま導入するものではない。
・カリキュラムの細部は異なるが、学びの姿勢や雰囲気については参考となり、今後の検討に資する内容であった。

《対話》

1 参加者【転入・転出への対応について】

・IB 校の場合、家庭の事情等で転入・転出が生じた際に、学習面で支障が出ないか、注意点はるか。

➡ 応答

・IB は教育プログラムであり、転入・転出を制限する規定はない。
・DP は 2 年間の枠組みがあるが、初等・中等段階では在籍年数の縛りはない。
・日本の学校では、学習指導要領・教科書に基づく教育課程を実施した上で、IB の枠組みを重ねる。そのため、IB 校だから特定の内容を学んでいないという事態は通常起こらない。
・円滑な転入・転出のためには、学校間の引き継ぎやコミュニケーションが重要。
・公立 IB 校でも、時間割やカリキュラム自体は大きく変わらない。違いは、探究学習や教科横断的学習など、学び方・授業の進め方にある。
・基礎学力の内容は共通しており、転入・転出による大きな戸惑いは生じにくい。仮に違いがあっても、日常の学習の中でキャッチアップ可能な範囲との認識。

2 参加者【多様な特性のある子どもへの対応について】

・公立の幼稚園・小学校・中学校に IB 的な教育を取り入れる中で、特別支援学級等で学ぶ子どもを含め、さまざまな特性のある子どももなじんでいけるのか。

➡ 応答

・子どもは一人ひとり異なり、IB は特定の能力や条件を求める教育ではない。
・読み書き能力などの事前条件はなく、柔軟性の高い概念型プログラムである。

- ・教室での学び方は、教員が子どもの状況に応じて判断・工夫することが前提。
- ・発達段階等に応じ、活動内容への配慮は必要だが、排除されるものではない。
- ・学力や特性に応じた学びはこれまでも行われており、特別支援教育や特別支援学級の枠組み自体は変わらない。
- ・IB 導入により、学びの選択肢や可能性が広がるケースはあり得る。
- ・不登校対応等も含め、公立校としての基本的な対応の考え方は従来どおり。
- ・すべての子に一律に当てはまるわけではないが、個別に適した学びにつながる可能性はある。

3 参加者【IB 教育における教員の採用・資格について】

- ・公立校で IB 教育を行う場合、教員は通常の教員採用試験合格者なのか、それとも IB に詳しい教員を別途採用するのか。

➡ 応答

- ・IB 機構が教員の採用に直接関与することはない。採用の前提は、教員免許を有することであり、学校設置者の責任で行う。
- ・IB 教育を実施する教員には、IB が定める教員研修の受講が必要で研修は資格試験ではなく、修了者には受講証が発行される。
- ・研修は形式的なものではなく、教育内容を理解し実践に生かすことが重視される。
- ・大学院等で取得できる**IB 教員資格 (IBEC 等)**もあるが、一般の教員については、IB 教育向けの研修受講により対応可能。

4 参加者【IB 教育に合う子ども・転校の可否・知る機会について】

- ・IB 教育に興味を持った場合、転校は可能なのか。
- ・子どもや保護者が IB 教育を知る機会はあるのか。
- ・どのような子どもが IB 教育に向いているのか。

➡ 応答

- ・特定のタイプの子どものみに限定した教育ではない。
- ・探究が好きな子、発言が得意な子だけでなく、さまざまな子どもが学んでいる。
- ・答えを一つに求めるのではなく、多面的に考え、自分の考えを導く学びが特徴。
- ・プログラムを通じて、自分の意見を説明する力や人との関わりに自信が育つ可能性がある。
- ・IB 教育を知る機会として、IB 機構や文科省 IB コンソーシアムによるセミナーやイベントがあり、対面、オンラインで参加可能。
- ・宝塚市で想定している導入候補は西谷地域の幼・小・中学校。
- ・西谷は小規模特認校であり、市内在住で希望があれば通学は可能。
- ・現段階では、教員の理解・研修を優先して進める段階。

- ・子どもや保護者への周知は、今後検討していく。

5 参加者【IB教育における人材育成と子どもの進路形成について】

- ・探究を共に進める教員（ファシリテーター）は貴重な人材ではないか。国内でどの程度人材が確保できているのか知りたい。
- ・IB教育を経た子どもたちが、どのような進路・キャリアを歩んでいるのか。
- ・一般的な教育との違いについて、現場の実感を聞きたい。

➡ 応答

- ・IB認定校で教える教員は、IBの研修（ワークショップ）を修了していることが前提。
- ・探究学習だけでなく、基礎学力の学習も重視されるため、教育内容が大きく乖離するわけではない。
- ・教員不足というより、研修を受けながら継続的に学び続ける仕組みがIBの特徴。
- ・IB認定は定期的な更新があり、教員自身も学習者であり続ける。
- ・IB修了生の進路は多様で、特定の進路に限定されるものではない。高校・大学ともに、国内外さまざまな選択肢がある。
- ・共通する傾向として、自分の世界を多面的に捉える「自分に何ができるか」を考え続ける姿勢が育っている印象がある。
- ・IBを通じて、視野が広がり、次のステップを主体的に選ぶ力が身についていると感じる。
- ・自身の体験より、IB＝海外大学進学一辺倒ではなく、国内進学も半数程度であった。途中で進路を変更し、自分のやりたい分野を選択する例も多い。また、教員が生徒の選択を尊重し、「やりたいことを見つける過程」を支える教育だったと実感している。
- ・公立IB導入校の事例でも、多くは地域の一般的な進路を選択している。
- ・IBは「特別な魔法」ではないが、探究する姿勢や考え続ける力を子どもの中に残す教育。その影響の現れ方は、子ども一人ひとり異なるという認識。

6 参加者【IB教育導入の考え方と今後の方向性について】

- ・宝塚市が数ある教育手法の中からIB教育を選んだ理由は何か。
- ・西谷での導入を踏まえ、今後市内他校へ広げる考えはあるのか。

➡ 応答

- ・西谷地域では、学校の存続と特色づくりが課題であり、自然や地域性を生かしながら、より分かりやすい教育の強みが必要だった。
- ・IB教育は、知識の習得に加え、自ら考え行動する力を育てる点で、西谷の教育環境と相性がよいと判断した。
- ・まずは西谷で実践・検証を行い、成果や課題を見極める段階である。他校への展開は、市民の理解や要望、財政負担を踏まえ、今後検討していく。

7 参加者【IB 教育導入時期の見通しについて】

- ・西谷の学校で IB 教育はいつ頃から始まるのか、目安はあるのか。

➡ 応答

- ・現在は IB 教育に関する調査研究段階（関心校）であり、開始時期は未定。地域、教育委員会、学校現場、保護者、子ども、市民の理解が得られた場合に、候補校として申請する。候補校となった後、カリキュラム整備や教員研修を進め、IB 機構の訪問調査を経て認定校となるが、具体的に何年かかるかは一概に示せない。
- ・一般的には、候補校から認定校まで約 2～3 年を要する例が多い（PYP・MYP の場合）。

8 参加者【IB 教育への協力・人材提供について】

- ・子どもが PYP から DP まで IB 教育を受けた経験があり、配偶者が画家で、IB 校からの要請によりアート教員として国内外で指導経験がある。IB 導入に向け、何か支援できることがあれば協力したい。

➡ 応答

- ・IB 導入の表明以降、同様の協力申し出が複数あり、心強く感じており、感謝する。今後の参考としたい。

9 参加者【IB 教育の年齢区分と公平性について】

- ・PYP（3～11 歳）と MYP（11～16 歳）の年齢が一部重複している理由は何か。
- ・IB 教育を受ける子どもと受けない子どもが市内に混在することで、不公平感が生じないか。

➡ 応答

- ・IB は国ごとに学校制度が異なるため、柔軟に対応できる年齢設計としている。PYP は最長 12 歳まで提供可能で、国や学校によって移行時期が異なる。MYP は 5 年間のプログラムで、日本では中学 3 年間のみの導入も可能。
- ・市内の子どもには、IB を選ぶ・選ばないという「選択肢」がある点で公平性は保たれると考えている。ただし、西谷地域は選択肢が限られるため課題は認識しており、調査研究を重ねながら整理が必要。
- ・地域からの要望や教育の特色を踏まえつつ、行政として公平性の確保を重視して検討していく考え。

10 参加者【IB 教育における教員の確保と導入体制について】

- ・過去に IB 校の立ち上げに関わった経験から、当初は外国人教員や IB 経験者が中心であった。現在は IB が広がっている中で、日本の公立学校において、研修を受けた教員で円滑に導入・継続できているのか。研修を受けた教員によって、現在どのような学校

づくりが行われているのかを知りたい。

➔ 応答

- ・日本での IB 導入は当初インターナショナルスクール中心で、日本語資料もなく、日本人教員の参加は難しかったが、2013 年以降、文部科学省との連携により資料の日本語化や研修体制が整備され、日本人話者の教員も参画可能となった。
- ・IB は言語や出身に関係なく、日本の教員免許を持つ教員でも導入・実践が可能な教育プログラムである。
- ・全国の IB 校同士のネットワークや研修、オンライン交流が充実しており、相互に支え合いながら運営されている。

11 参加者【IB 教育導入に係る費用と財政的な考え方について】

- ・財政が厳しい中で、IB 教育の調査研究・導入にどの程度の予算規模を想定しているのかを知りたい。

➔ 応答

- ・候補校申請時に申請費用が必要となり、認定校・候補校ともに、学校単位での年間費用が発生する。
- ・年間費用は候補校の間は各プログラム毎に今年度は約 13,500 シンガポールドル（日本円で約 160 万円）。これに加え、教員研修費（教員 1 人あたり約 12～13 万円）や、コンサルタント訪問時の費用が別途必要となる。
- ・費用対効果を含め、調査研究の中で丁寧に検討していく段階である。
- ・市内全校への導入は困難だが、1 校であれば市全体の予算規模から見て吸収可能と考えている。
- ・教育移住や地域活性化といった副次的効果も含め、宝塚市としての価値を見極めながら判断していく。

12 参加者【IB 教育に携わる教員のやりがい・モチベーションについて】

- ・IB 教育に携わる教員は、研修や負担もある中で、どのようなやりがいや思いを持って取り組んでいるのかを知りたい。

➔ 応答

- ・新しい教育システムへの対応や研修など、一定の負担や自己研鑽は必要となる。その負担を「負担」と捉えるか、「学び・成長の機会」と捉えるかで感じ方は異なる。
- ・IB 校教員は、世界中の教員が参加するオンラインコミュニティに所属し、質問や相談をすると他国の教員から助言が得られる。国や学校を超えた助け合いのネットワークがあり、孤立せずに実践を深められる点は大きな魅力である。
- ・教員自身が学び続け、子どもに合わせて柔軟に教育を工夫することにやりがいを感じられる人にとっては、前向きで魅力的な教育である。

13 参加者【IB教育が育む価値観・自己肯定感と情報発信について】

- ・IB教育は、多様な価値観を尊重し、自己肯定感や幸福度の高い人を育てているのか。文科省がIBを推進するようになった背景を知りたい。
- ・市ホームページ上のIB関連リンクは、日本語表記のページを案内した方が理解が深まるのではないかと。

➡ 応答

- ・IB教育を受けた子どもは、国や文化を超えた多様な視点を理解しようとする姿勢が育つという調査・実感がある。
- ・IBでは「正解は一つ」という前提に立たず、立場や視点の違いを前提に考える学びを重視している。
- ・授業では探究や対話を通じて、自分の考えを形成し、説明し、他者に受け止めてもらう経験を積む。
- ・その積み重ねが、自分の意見を持ち、発言する力や自己肯定感につながると考えている。
- ・教員が答えを押し付けるのではなく、考えに至るプロセスを重視する点がIB教育の特徴である。
- ・市ホームページのIB関連リンクについて、日本語表記のページへ修正する。

➡ 小谷さん【IB教育における「自分の意見を持つ力」の育成について】

- ・IB教育を受けた後、日本の教育では「自分の意見を持つ子どもが少ない」と強く感じるようになった。IBの教室には発言が得意な子どももいれば、内向的で発言しない子どももいる。発言の多い生徒が、発言できない生徒の考えを無意識に覆ってしまうことに気づき、クラスで話し合いを行った。IBでは、発表するか否かに関わらず、すべての生徒が「自分の意見を持つこと」を求められる。

問いを立て、自分なりの答えを見つける学びが徹底されており、他者の意見は参考であって正解ではないと教えられる。そのため、IB教育を受けた子どもは、発言の有無に関係なく、自分の考えを持っている生徒が多いと感じている。

《市長まとめ》

- ・海外での学びや子育ての経験から、日本の学校教育、とりわけ授業の在り方に課題意識を持った。
- ・IBで見られる探究型の学びは、子どもが主体となり、教師が支援役に回るものであり、実際に高い学習効果と成長を感じた。
- ・IBは英語教育やエリート教育ではなく、長年培われてきた普遍的な教育理念に基づくもので、日本の教育目標とも方向性は一致している。

- ・日本の公立校でも実績があり、既存の枠組みの中で導入は可能であり、教員にとっても新たな学びと刺激になると考えている。
- ・市長主導で進めるのではなく、現場の教職員や子ども、地域の意見を踏まえ、調査研究として丁寧に検討を進めたい。
- ・賛成・反対の双方の意見を受け止め、誤解や懸念を整理しながら、引き続き率直な意見を求めている。